

児島高德桜樹に書すの題す

齋藤

監

物

踏破^{ふやぶ}了^り千山^{せんざん}万嶽^{ばんがく}の煙^{けむり}

鸞輿^{らんよ}今日^{こんにち}何^{いず}れの辺^{へん}に到^{いた}る

单蓑^{たんさ}直^{ただ}ちに入^い了^り虎狼^{ころう}の窟^{いわや}

一七^{いつび}深^{ふか}く探^{さぐ}了^り鮫鰐^{さうがく}の淵^{ふち}

報国^{ほうこく}の丹心^{たんしん}独力^{どくりきよ}も嗟^{なげ}き

回天^{かいてん}の事業^{ぎやう}空拳^{くうけん}を奈^{いか}せん

数行^{すうこう}の紅淚^{こうろい}兩行^{りやうぎやう}の字^じ

桜花^{おうか}に付^つ与^よして九天^{きゅうてん}に奏^{そう}す

【作者】 齋藤監物（一八二二〜一八六〇年）（文政五年〜安政七年）、常陸国那珂郡静村の龍神社社官・齋藤式部の子として生まれる。藤田東湖に師事し、剣術を学んだ。藩校弘道館の鹿島神社の神官となった。安政七年（一八六〇）二月に脱藩。三月三日の桜田門外の変に参加。五日後の三月八日に死去。

享年三十九歳。

【語釈】

- * 千山：多くの山。 * 鸞輿：天子の輿。 * 虎狼の窟：敵陣のこと。
- * 一七：一本の短刀。 * 鮫鰐の淵：敵陣のこと。 * 丹心：まごころ。
- * 回天：時勢を一変すること。 * 九天：宮中の異称。

【通釈】

山また山を越え、谷を渡り霧に道を迷いながら、天皇のお乗り物ほどの辺りだろうか。蓑を着て百姓姿に変装し、一本の短刀をふところに敵陣に忍び込みお乗り物を探した。報国の真心はあるが独りの力だけでは実現できず、王政復古も今すぐに実現できない。（天は勾踐を殺してはならない、時が来れば范蠡のような忠臣が出ないこともない）涙を流しながら、二行の漢詩を、行在所の桜の木に書きとめ後醍醐天皇に奉った。



【解説】

児島高德が後醍醐天皇が隠岐に遷幸されるのを奪還しようとして果たさず、因の荘（今日の津山市院王）の行在所に潜入し、桜の幹を削り、（天莫空勾踐時非無范蠡）との二行の詩句を書し、自分の微衷を奏上した故事を素材に詠じたもの。

元弘二年（1332）三月、北条氏のため隠岐に流される後醍醐天皇を途中で奪還しようと、備後三郎こと、児島高德は義兵を集めて舟坂峠で待ち構えたが、鸞輿は他の道を通り、義兵達は四散した。

「やむなく高德は单身、行在所に忍び、警護の目をかすめて、庭前の桜の木の皮をはぎ、天、勾踐・・・」の詩句を書き付けた。

この史話の忠誠をたたえつつ、同時に作者自らの心情を詠じたもの。

【鑑賞】

児島高德は備後の人。（通称備後三郎）。北条時高によって隠岐に流されようとする後醍醐天皇を途中で奪還しようとして舟坂山に義兵を集めたが、車駕は転じて山陰に入り、急追して美作の杉坂に到着したが、すでに通過のあと、失望した義兵はことごとく散った。

高德はやくなく單身因の荘の行在所に忍び込み、庭前の桜を削り、十字の詩を書いて微衷を奏し、御心を慰めた。

詩中の范蠡は越王勾踐の臣で、呉王夫差と不脛の地で戦って敗れたが、会稽山に潜み、苦辛惨憺二十年の後、ついに王を助けて呉王の軍を五湖に破った。

その故事にのっとったものだが、警護に兵にわかるはずはなく、帝一人これをご覧になって意を強くされたという。

作者監物は、この高德の誠忠と勇気を示す事蹟を考えながら、自分を振り返り、井伊直弼暗殺の計画に加わる自分を思ったのであろう。

詩中の ^独力 V ^空拳 V ^単蓑 V の語が切実に生きている。果たして、桜田門外では、折からの雪のため蓑をまとわねばならなかった。